

五歳児の字に対する興味と個人差



洗足学園幼稚園

私たちの幼稚園におきましては、これまで字に対しては、先生が表だった計画案をたて、指導するということは、やっておりませんが、何らかの形で、子どもたちの中にある、字に対する興味を、刺激させる意味で、子どもの成長に応じ、環境を設定するようにしてまいりました。

例えば、入園当初は、靴箱、鞆の棚、帽子掛等に、貼紙を使用しておりますが、自然に名札だけにしましたり、四歳後半になりますと、遊びにカルタ取りを入れたり、積木に絵と字の書いてあるものを置いておいたり、ごっこ遊びで、簡単な郵便屋さんごっこをして、作った絵はがきに、先生が字を書いてあげることをしてたりしております。

五歳になりますと、子どもたちの興味も大分出てくるようになります。最初の父兄会では、お家でも聞いたり、書いたりしてい

る時は、ちょっと見てあげて、正しく読む、書くということを教えて上げて下さるようお願いし、幼稚園でもそのように扱うことを心掛けるようにしました。五歳になりますと、書くという面も出てまいりますので、幼稚園では、お当番表に自分の名前が書ける人は、書いたり、病気見舞の絵に文を添えたり、紙芝居作りや、自分たちで文字を使って、盛んに、はがきのやりとりをして、郵便屋さんごっこをしたりしております。

今回の調査をきっかけに、現在、五歳児がどの程度に、字というものを理解し、把握しているかを、折に触れて、日記にしてあるもの等から、左記の項目をあげて、年長六クラスの現状を、話し合ってみました。

- 一、自分の名前を書く、読む。
- 二、自分の思っていることを、文章にする。

三、文を読む。

四、数字に対しての興味、理解。

五、漢字に対しての興味。

六、英語に対しての興味。

自分の名前については、十一月現在で、ほとんどクラスの全員が、書き、読むことができるようになっていくようです。文章にできるかどうかという問題については、私たちの園では、年長になりますと、毎月お誕生日の人に絵を描いてあげ、それをノートにして、プレゼントすることにしておりませんが、字が書ける人は、ぼつりぼつり、おめでとうということぐらい、書いてまいりましたが、その数がだんだん増し、文もできるようになってまいりました。それで今回は、その絵の裏に、自分の書きたいことを書いてみました。それによりますと、多少クラスによって差はありますが、平均してクラスの六〇パーセント程度の人が、自分の思っていることを文章にして書くことができ、一字一字を考えながら、書く人や、わからない字を先生に聞きながら、書く人を除いて、自分の名前がやっと書けるようになったという人は、クラスの大体的五パーセント（二、三人）程度の方です。

次に読めるかどうかという問題ですが、絵本の中の何行かの文を、読ましてみえたところ、これもほとんど、文章を書けるか

どうかの問題と、同じような結果がみられ、（もちろん、クラスによって多少の差は、ありますが）クラスの六〇パーセントの人が、内容を理解した読みかたが、できるようです。（六〇パーセント中四〇パーセントは、すらすら、つかえずに読むことができるようです）

一字一字読む人や、ひろい読みの人を除いて、自分の名前だけしか読めないという人は、やはり、五パーセント程度でした。

次に、字に対する興味、理解ですが、これは、画用紙に好きな時計を描かせ、その文字盤の書き具合（数字の位置は、問題にせず、順番だけを見ってみました）を見てみますと、これは四歳の時から、触れる機会が多いせいとか、全く書けないという人は、いまいやうで、クラスの七〇パーセント程度の人が、正確に書くことができるようです。これは、数に対する興味や、理解に通じるように思います。

次に漢字に対する興味ですが、これは、自分の名前を、たくさんの中から、探し出すことができる程度の人が、一番多く、書くという意識までは、いつていないようで、やさしい字の人で、姓だけや、名前だけを書く人が、クラスの中に、二、三人いる程度でした。（しかし中には、七夕の時に、「七夕」「天の川」と書いたり、田、上、下など漢字を知ること、興味を示し、やさ

しい漢字を、覚えてくる人もいました)

次に英語ですが、最近の生活様式から、英語を目にしないというところが、なくなつたせいか、予想以上に書くことができるようです。特にABCまでは、目に触れる機会が多いようで、ほとんどの人が書いていました。概して男児の方が、玩具の影響が、種類も多く書くことができるようです。

これらの調査結果は、五歳児の、十一月現在のものですが、これを見て感じますことは、予想していた以上に、字というものが、子どもたちの生活の中にはいり、子どもたちのものになっているように思えます。これは、四月頃の、名前が書けない人が、クラスの一五パーセント程(多いクラスでは、五〇パーセント近く)であったものと比べますと、夏休みを契機として、また先に掲げましたお誕生カードの作成を通して、字に対する興味が、大きく伸びてきているといえるようですし、また子どもたちの成長段階が、ちょうどそういうものに向く段階にきているように思えます。これらの結果は、冬休みを過ぎて、年賀状、カルタ取り、トランプ遊びを経験することによって、また変わってくるのではないかと思います。

しかし子どもたちの一人一人が、伸びてきていると同時に、個人差も、四月に比べますと、大きく目立つようです。文を読むと

いう問題にしましても、進んでいる人は、その内容を理解し、感情を入れて、(お母さんは、お母さんらしい声で、子どもは、子どもらしい声で)読み、またいろいろな図鑑を、こなして活用する人、伝記物を読む人もいますが、全く読めない人もいます。また概して、男児より女児の方が、正しく書き、読むことができ、書こう、読もうという気持ちも、大きいように思えます。(名前がやっとなという人は、全部が男児でした)個人差が見られる原因としては、

第一に生年月日の違い。(理解できないという人は、早生まれの人に多いようです)

第二に環境によるもの。(生まれ月が早くても、家庭で、そのような方向づけをしていない人は、興味も示さず、伸びも遅いようです。概して兄弟のいる人は、興味の示し方も早いように思います)

第三に性格によるもの。(家庭の環境、友だちの環境が、整っていないと、一向に伸びない人がいますが、これは、ある程度、持つて生まれた性格や能力が、影響しているものと思われれます)

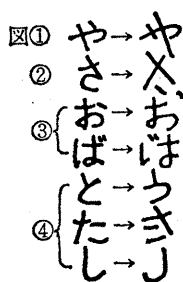
第四に左利きによるもの。(中には器用に、正確に書く人もいますが、どうしても伸びが遅いように思われれます)

等があげられると思いますが、問題は、小学校入学を前にし

て、この個人差を、幼稚園という環境の中で、どのように扱うかということにあるのではないかと思います。私たちが現在できることは、折をみて、自分の名前を正しく書くということの個人指導をすることだけです。昔と違い、全体に大きく伸びてきている現在、この子どもたちが小学校に入ってから、この差を、どのように対処していくか、少し心配です。また他にも問題点は、たくさんあります。例えば、

書き順の違い（興味を持ち、進んでいる人でも、書き順の違う人は、たくさんいます。）

字の形の悪いもの、（のばすべきでないところを、のばし過ぎたり（図①）、横にのばすべきのものを、斜めにのばし、読めない字になったり（図②）、点をうつ位置が、曖昧であったり（図③）、うら字（図④）、あて字（発音が同じになる、わは、えへ、おを、を正確に書ける人は、ほとんどいないようです）大きなそろわない字などなおさなければならぬ点が、たくさん出てまいります。



早生まれで、全然字が書けなかった人で、お習字を習いにいくようになり、正確できれいな字が、書けるようになったこと

がありました。このことから、いかに基礎が大切であるかを、感じさせられます。このように、基礎の段階にいたる子どもたちの、これらの問題を、幼稚園という、特殊な教育内容を持った環境の中で、どこまで解決するかが、大きい問題点となるのではないかと思います。

幼稚園の指導内容には、とり入れなくても現実に、書いたり、読んだりすることのできる子どもたちが、増えてきております。また、大きく興味を示す段階にもあると思います。そのような段階にあることを、無視するわけにはまいりません。やはり自然の発達に合わせて、環境を設定し、これまで（入園当初から、二期まで）の道程を楽しんで、正確さを期していなかったものから、一歩進み、正確さを意図として、指導することも、大切ではないかと思えます。

幼稚園が、小学校入学の前段階である意味からも、小学校とのつながりを考え、字について、どのように進めるべきかが、私たち、現在悩んでいる問題であり、これからも大いに、研究すべき問題ではないかと思えます。これは当幼稚園の五歳児六クラスの、現在の状況を、各担任が、それぞれ話し合った結果の、たんなる報告でございます。